

49. 井戸・電気・風呂

井戸水を汲み、晩にはランプを灯し、回り持ちでもらい風呂をしながらつつまじやかに生きていた時代があった。電気の登場は文明の明るさをもたらした。

◆カナケの水を漉す

別府の井戸水はカナケが多く真っ赤な鉄分の水だったので、毎日の水を漉すコシミズは女の子や女中の仕事だった。小砂利を壺に入れてシュロで漉す。水を漉すのには時間がかかるので、あくる日に使う水を夕方に漉して水がめに溜めておく。砂利の目がつまると漉せなくなる。女手ではさらの砂利は採れないので3ヶ月に1度は砂利を洗って使った。

〈A〉は聞き取りから復元した別府のコシミズの装置。「壺」の外形と材質は聞き落とししたので、ひとまず桶構造に描いてみた。

◆井戸の掃除

七日盆には村一帯に井戸の掃除をした。出入りのおじいさんが毎年きまって来てくれた。うちの井戸は深くて底はぐっと下なのでハシゴかけて下りて、何回も汲み上げて流して掃除してくれた。この時コシミズのザリ（砂利）も新しいのに換えてくれた（別府）。

〈C〉は滑車。カードには用途は書かれていないが、井戸のつるべ用か。

◆電灯がつく（千里丘東）

摂津市域からは馬力で大阪へ肥汲みに行く人があった。その人らの口から「オイ、大阪は晩なったら、電気パーッとあかいのんつけおって、えぐいことしよるわー」という話は伝わっていた。

千里丘東の太中では、大正3年（1914）9月にはじめて電灯がついた。「そらびっくりするほどあこ（明かる）おましたで」。青い光に見えたという。ランプとの光量の差が印象的に語られている。各家に一斉についた。

はじめは一家に1灯、台所につけ食事がすめば長いコードで居間に引っ張っていった。

電球は〈B〉のようにフィラメントが上下にジグザグする透明球、切れると関西配電株式会社に交換してくれた（千里丘東）。

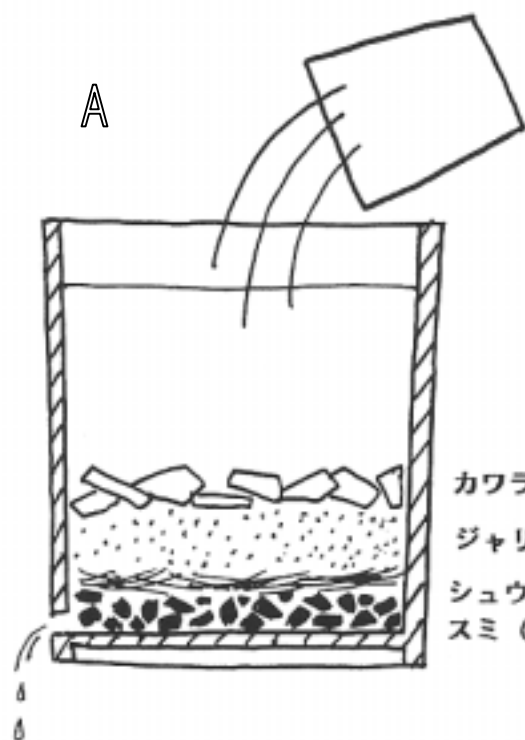
◆五右衛門風呂（千里丘東）

風呂は2〜3軒で組んで、互いにもらい風呂をした。風呂場は暗かったので汚い湯も見えなかったものだ。

〈E〉は五右衛門風呂。〈D〉のようなゲスイタをはめた。

〈F〉のようなチョウシブロ（長州風呂）もあった。

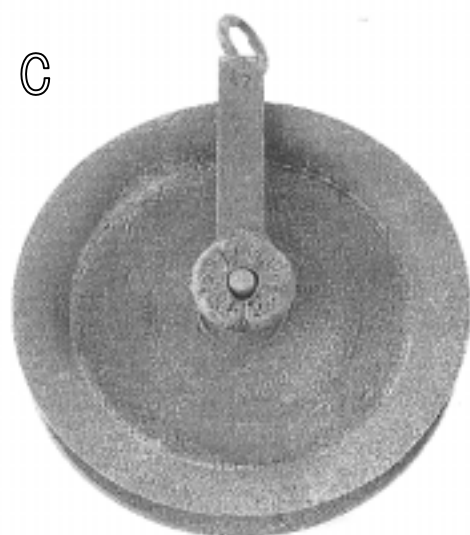
A



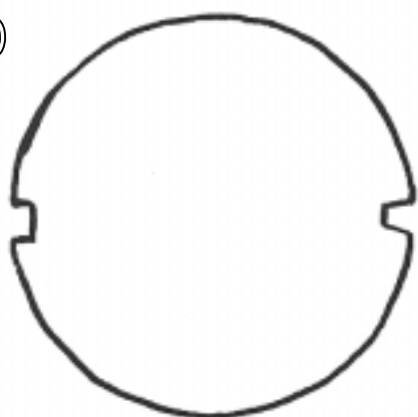
B



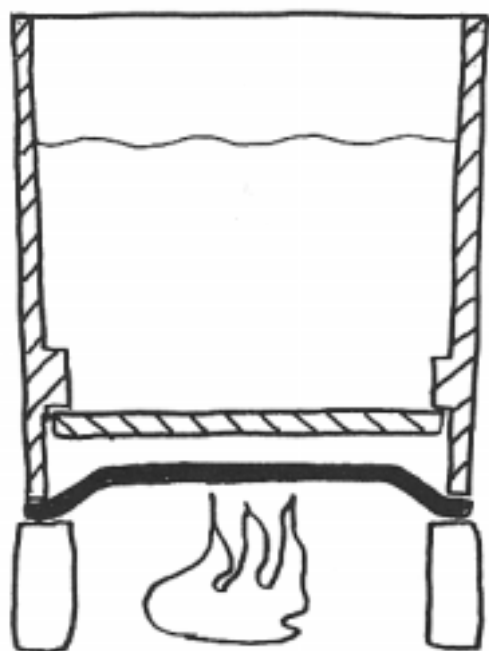
C



D



E



F

